

トウモロコシと畑作技術体系を叫び続ける

改めて子実トウモロコシに注目してみようと思う。すでに北海道だけで1000haを超え、全国では1500haに達しようとしているという。水田飼料作としての子実生産にも都合4万5000円の交付金も付いているが、府県では広がりももう一歩という感がある。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

子実トウモロコシを取り巻く環境が大きく変わってきた。貿易統計によれば今年9月のトウモロコシの輸入価格は飼料用でもt当たりで3万2848円。コーンフレーク用では3万5345円。kgにしたら32・8円と35・3円だ。Non-IGMならさらにプレミアが付く。過去10年で最も高かった2013年のレベルまで高騰している。アメリカの利上げや景気回復などでもう一步の円安に向かいかねない。それだけでなく石油価格は今後も高値水準が続くそう、それにも引張られる形で輸入価格の高騰は進みそうだ。

改めて子実トウモロコシに注目してみようと思う。すでに北海道だけで1000haを超え、全国では1500haに達しようとしているという。水田飼料作としての子実生産にも都合4万5000円の交付金も付いているが、府県では広がりももう一歩という感がある。

心とする原産国の作柄や在庫量、為替水準、海上運賃、石油価格その他の金融商品の価格の推移に左右される。それに加えて、中国によるトウモロコシ、大豆などの飼料穀物の爆買いは続くだろう。それに加えてCO₂削減という値上がりの条件が出てきた。

アメリカは2030年までに2005年比で温室効果ガス排出を50%削減すると発表している。アメリカがエネルギー調達の切り札としてきたシェールオイルを減産し、トウモロコシを原料とするバイオ燃料利用にさらに力が入るはずだ。この温室効果ガス削減という流れはおそらく収まる気配はなく、中国のトウモロコシ爆買いも変わらないだろう。

トウモロコシは我が国が最も海外に輸入依存している農産物であり、約7割は飼料用だが、その他ありとあらゆる食品の生産に関係している。畜産酪農は大打撃を受けるだろう。「だから飼料米だ」などという議論も出てくるだろうが、過大な財政負担を伴う飼料米への批判が人々に受け入れられていくだろう。なぜなら、現在の輸

入価格水準であれば現在の飼料米へのそれと比べればはるかに少ない財政負担で賄えるトウモロコシの国内生産でかなりの部分が解決できる問題だからだ。

「いくら国産化しても輸入物との価格差で太刀打ちできない」などと言われていた時代がすっかり変わっていきそうだ。

北海道でこそ生産は伸び、飼料仕向けだけでなく、飲料、食品分野にも市場を広げようとしている。にもかかわらず、府県では一部に意欲ある生産者はいらぬもの、もう一つ広がりてきていない。それどころか、そうなることは誰の目にも明らかであったにもかかわらず、またぞろコメ市況の低迷を問題視する人々が少なくない。

これまで何度も言ってきたが、単位面積当たりの収益を考えるだけでなく、投下労働力当たりの収益を考えるならトウモロコシはむしろコメなどより収益が良いのだ。それを理解して取り組む人々がいる半面で交付金額に引張られて従来のコメ農業から自由になれない人々と農業関係者がそれを妨害している。それに加えて水田を含めた我が国の農業に畑作型の技術体系の定着が必要なのだ。